

雨粒

雨粒がガラスにブツブツとへばり付いてきやがる
言葉なく、小っぼけな虚栄と化した俺は
ただ、お前との間の空気をいじくっている
お前はただ、つまらなそうにそっぽを向いている
俺は自分の心の中を模索している

高速で車を駆る俺の目の端に
剥き出しのお前の脚が見え続けたが
どうしてか俺の心臓は全く静かだ
こんな静かな、しかし確かに燃える情熱は
お前によって、そっと点されたのだ

確かに情熱と呼べるに違いない
こんなにひっそり小さな炎だけれど
激しい雨が車を叩くが
車の中の俺とお前は、息詰まることもなく
底無しの静寂の中に揺らめいていた

(1982.7.1)